

「占い・おまじない」と女性

——鏡リュウジと「地図」の変容——

橋迫 瑞穂

本稿は、今日、女性誌で取り上げられる「占い・おまじない」が大人の女性たちに何を示しているのかについて、女性誌を中心に活躍している占星術研究者・鏡リュウジの活動を素材とし、「地図」という観点から明らかにすることをねらいとする。かつて、「占い・おまじない」の主な受容者は少女であったが、それは「占い・おまじない」が人生への指針を示す「地図」の役割を果たしてきたからである。ところが、従来は専門誌を中心に執筆活動を行ってきた鏡の主たる活動舞台が、一般女性誌にシフトし、大人の女性の読者を獲得している。その背景には、仕事や出産といった選択肢に直面する女性が、指針を示す「地図」を鏡の「占い・おまじない」に期待していることに由来する。それに対し鏡は「占い・おまじない」によって、イメージとしての「少女」を基準とした「地図」を提供しているのである。このことを明らかにするのが、本稿の課題である。

1 問い

「占い・おまじない」は、われわれが自らの立ち位置を確認し、進むべき方向を見定めるための「地図」のような役割を担って、日常にさまざまな形で浸透している。宗教社会学者の芳賀学と弓山達也は『祈る・ふれあう・感じる——自分探しのオデッセー』（芳賀・弓山 1994）のなかで、若者と新宗教や精神文化の結びつきに焦点をあてて、検討している。そのなかでとくに注目しているのが、占いである。芳賀らによれば、占いとは「予兆（きざし）となる現象をもとに、想定される何らかの因果関係に基づいて、結果となる現象を導き出す方法」（芳賀・弓山 1994:216）である。その意味では、占いはあくまで未来に起る事柄を予測するためのものであるが、その予測は現在自分がどのような状態、どのような位置にいるのかをはっきりと

見定めた上で、これからの未来を予測するものである。それには、さまざまなヴァリエーションがあるが、そのなかで、1990年代に若者のあいだで流行ったのは、『My Birthday』（実業之日本社）と題する占い専門誌が流行したことから推測されるように、誕生時という生得的な条件を基にした占いであった。生得的な基準に依った占いは、数値化が可能であるため「オカルティックな靈感」（芳賀・弓山 1994:222）を必要とはせず、また、「自分自身の存在はしっかりとつかみきれていない」若者に、自分自身を解釈することを可能にし、仕事や人間関係、恋愛といったものについて方向性を示すものであった。さらには占いによる結果に対し、予防策としての「おまじない」が組み合わせられることで、さらに若者からの支持を得るようになったと芳賀らはいふ。「占い・おまじない」は、自己とそれをとりまく人間、さらにお互い

の関係性を解釈して、よりよい結果を与えるものとして機能している。「古い・おまじない」にみられるこうした解釈枠組みを、芳賀・弓山は「認識のための地図」と呼ぶ¹⁾。

もっとも、この「古い・おまじない」による「認識のための地図」とは、「地図」そのものが持つ性質と相違がある。では、そもそも、「地図」とはどのような存在なのだろうか。地図の意味を社会学的に読み解いた若林幹夫は、『地図の想像力』（若林 2009）のなかで、「地図」とは、世界や日本、東京といった世界や地域を、実際に見たことが無いにもかかわらず「通常の視点からは視ることができない社会の全体」の縮図として了解し、さらには、われわれが生きている社会そのものが、世界において特定の領域を形成し、『『空間としての社会』』として了解されている」という特徴をもつものと述べている（若林 2009:17）。こうした「地図」は実際的な俗なる空間のみを映し出すのではなく、近代以前の社会では、彼らの空間を秩序立てるために、神話的な聖なる空間をも「地図」に織り込まれていたと若林は述べている（若林 2009:82-84）。だが、こうした「地図」は、特定の超越的な視点によって生み出されるものではなく、さまざまな視点から見られた空間の集積によって成立している。それゆえ「地図」とは、人間によって解釈され記述される主観的なテキストであり、その意味で「地図」は、他者との関係を作り出すメディアとして存在する（若林 2009:66）。

それは、「地図」のありようが社会によって左右されるという性質と関連する、二つの特徴と関わっている。すなわち「地図」が社会によって左右されるのは、われわれが日常において社会について述べる時の言説のように、『『世界というテキスト』』を読み解こうとする」（若林 2009:229）ための想像力として存在しているか

らである。言い換えれば「地図」とは、空間的な世界像を示す存在であり、それが特徴の一つとなっている。だが、それだけではなく、「地図」は他者とのコミュニケーションを内在させながら、社会的実践によって生きられる存在でもある。そこで、「地図」の二つ目の特徴として、いわば社会的実践による世界像の定位という特質が挙げられる（若林 2009:230）。この二つの特徴は互いに独立しているのではなく、相互に結びついて「地図」を成り立たせているのである。

このように、「地図」とは、本来、特定の視点にもとづいてつくられるものではない。だが、「古い・おまじない」は、それを求める者と提供する者との間の共通の言説の上に成り立つものであり、それが提示する「地図」はその言説を共有する者にとってしか意味を持たない。したがって、「古い・おまじない」が提供する「地図」は、当然のことながら、特定の視点に立って生みだされるものであり、その限りでそれは必然的に歪みをもったものとなる。だがそれは、「古い・おまじない」の提供する「地図」が固定的で絶対的な視点に立つものであることを意味してはいない。すでに述べたように、芳賀・弓山によれば、当時、若者の間で流行った「古い・おまじない」は数値化が可能で、誰もが関わることのできるものであった。それは、本来の「地図」が、世界をテキストとして読み込むメディアとしての側面をもっているという特質と共通する。したがって、「古い・おまじない」が提示する「地図」とは、一つの視点による歪みを内包しつつ、同時に、それに関与する人びとによってその具体的な意味と機能が左右されるという、一見矛盾した特徴をそなえているといえるだろう。

そして、このような矛盾する「地図」を示す「古い・おまじない」は、その主たる対象を若者に限定するものではなくなりつつあるのが、今日

の一つの重要な特徴である。そうした状況を端的に示しているのが、占星術専門家を名乗る鏡リュウジの活動である。鏡は、主に30代の女性を読者層とする雑誌において、西洋占星術にまつわる12星座ごとの詳細な鑑定に関する記事をはじめ、占星術について多様な記事を載せている。また、鏡をよく取り上げる雑誌は、占いに特化した専門誌ではなく、女性のライフスタイルを総合的に扱う雑誌であることに特徴がある。そのため、鏡が「占い・おまじない」にまつわる記事を掲載するこうした一般女性誌は、ファッションや美容、グルメだけでなく、結婚や出産といったものについても特集を組んでいる。鏡の存在は、2000年代から始まった「スピリチュアル・ブーム」²のなかで、より広く知られるようになった³。「スピリチュアル・ブーム」が下火となりつつある今日でも、鏡は女性たちのあいだで安定した人気を得ている⁴。

これまで、雑誌における女性と「占い・おまじない」に焦点をあてた議論としては、例えば、芳賀学の「少女たちの物語製造装置・占い」（芳賀1994）と題した論文が挙げられる。そのなかで芳賀は、女子中高生や大学生といった、いわゆる少女向けの占い専門雑誌『My Birthday』や『Elfin』（学研）などをとりあげ、掲載されているコラムを「ミーイズム」と「自分探し」の観点から分析している⁵。他にも、同じく『My Birthday』に注目し、天皇や都市伝説にまつわる死のイメージを手がかりに、「占い・おまじない」が10代の少女たちのあいだに流行った理由を説明する大塚英志『定本・物語消費論』（大塚2001）が挙げられる⁶。だが、少女たちとは立場が異なる、いわば大人の女性を読者層とした雑誌における「占い・おまじない」が注目されることはなかった⁷。

もっとも、鏡リュウジの「占い・おまじない」⁸

が一般女性誌に登場するようになったのは最近のことである。鏡は80年代から90年代後半に至るまで、いわゆるオカルトを専門とする雑誌を著作活動の中心としたほか、占い専門誌にも執筆活動を行っており、現在でもそうした雑誌にたびたび記事を掲載している⁹。一方で、これら一般女性誌と専門誌に見られる鏡の「占い・おまじない」の記事には、全く異なる特徴を見出すことができる。すでに述べたように、「占い・おまじない」による「地図」は一定の視点に基づきながらも、それに関与する人びとに左右されるという特質がある。それは、「占い・おまじない」がすべての人びとに等しく求められているのではなく、ある特定の人びとにとっての有用性が特化された形で求められた結果である。鏡の「占い・おまじない」が雑誌によって異なる内容の記事を示しているのは、そのためである。

では、鏡リュウジの「占い・おまじない」は、大人の女性たちに向けた雑誌で、どのような「地図」を示しているのだろうか。ひるがえってそれは、占いやオカルトを専門とする雑誌における「占い・おまじない」による「地図」とどのように異なるのだろうか。本研究は、占星術専門家である鏡リュウジが大人とされる女性たちの雑誌において、どのように「占い・おまじない」を示しているのかに注目し、専門誌に見られる「占い・おまじない」と比較し、それを「地図」の観点から明らかにすることを目的とする。

以下では、まず2節において、鏡の経歴や活動について概観した上で、雑誌に見られる鏡の「占い・おまじない」が具体的にどのようなものであるかを、専門誌と一般女性誌の二つに分けて整理し紹介する。3節では、2節で明らかにした鏡の「占い・おまじない」の特徴を、雑誌に掲載されたエッセイや対談をもとにさら

に掘り下げて、検討する。エッセイや対談集を取り上げるのは、鏡の思想がそこに如実にあらわれていると考えられるからである。その上で、4節では鏡の「占い・おまじない」について改めて検討し、それが専門誌と一般女性誌においてそれぞれどのような「地図」を示しているのかについて比較し、明らかにする。

2 鏡リュウジと「占い・おまじない」

2-1 鏡リュウジの経歴と執筆活動

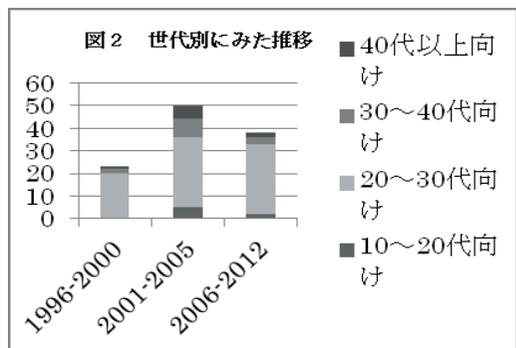
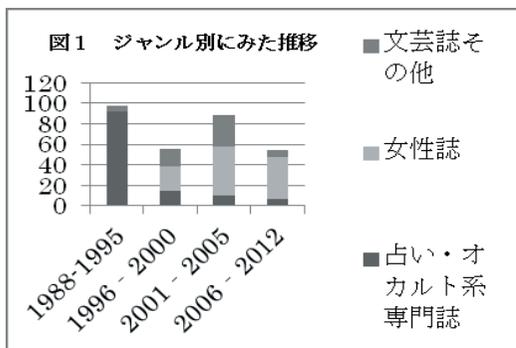
ここでは鏡リュウジの一般女性誌における著作活動について見ていくが、その前に、鏡の経歴について著作や公式サイトから略述しておく。占星術研究者である鏡リュウジは1968年生まれ、本名は服部彰浩といい、出身地は京都である。高校生の時から占いに興味をもち、大学院在学中より占いに関する本格的な執筆活動を始めている。鏡は国際基督教大学の修士課程を卒業しており、在学中はユング心理学を専攻していたという。そのために、学問的教養も深く、現在は、平安女学院大学の客員教授も務めている。鏡の活動は雑誌だけでなく、それ以外にも広く見られる。単著や翻訳書を公刊し、テレビやラジオ¹⁰、トークショーへの出演、さらには携帯サイトの運営などを行っている¹¹。また、朝日カルチャーセンターを中心に、西洋占星術だけでなくタロットや、心理学者ユングについての講座も開いている。最近では、占星術と関係する旅行¹²や、女性向けのファッションブランドのイベントをプロデュースするといった活動も行っている¹³。しかし、雑誌で読者サービスという形で募集される場合を除き、個人を相手に鑑定を行ってはいない。

すでに述べたように、鏡リュウジの活動の中心は、雑誌における執筆活動である。ここでは、

鏡が公認するウェブサイト「心理占星術研究者・翻訳家 鏡リュウジ公認情報サイト」と、鏡自身の公式サイト「Between the worlds」¹⁴をもとに、鏡の雑誌対象の著作活動に見られる傾向について概観しておく。その手がかりとしてここでは、鏡の雑誌における執筆活動の状況を検証する。具体的には記事の本数を、占い、オカルトの情報を中心としている専門誌と、ファッションやライフスタイルを掲載している一般女性誌、およびそれ以外の文芸誌などに分類し、それらを年代ごとに区分してグラフに示した(図1)。さらに、1996年以降、鏡が執筆活動を行っている一般女性誌を、読者層の世代別に分類しグラフにした(図2)¹⁵。

現在、鏡は一般女性誌を主な活動の場としているが、図1に示されているように、90年代の半ばまでは、オカルト、スピリチュアルを専門とする雑誌に多くの記事を書いており、そのなかでも特にオカルト専門誌である『ムー』(学研)や、『ムー』が女性の読者層をターゲットとして発刊した『Elfin』(学研)を活動の中心としていた。だが、90年代の半ばからは一般女性誌に執筆活動の重心を置き、他にも文芸誌である『ユリイカ』(青土社)といった雑誌にも連載を開始するようになった。もっとも、繰り返し指摘してきたように鏡の著作活動の中心は一般女性誌であることに特徴があり、図2からわかるように30代の女性を読者層とした、例えば『FRaU』(講談社)や『CREA』(文藝春秋)といった雑誌が執筆活動の中心となっている。ただし、最近でもオカルトや占いを専門とする雑誌での執筆活動も継続して行っている。

本研究が目する鏡リュウジの雑誌における執筆活動は、さらに内容の点で二つに分類することができる。一つは、占星術そのものに基づいて、「占い・おまじない」に関連する内容を



紹介したものである。その中には、占星術に基づいて、ファッションや旅行、グルメについての紹介や解説を行う内容のものも多く見られる。もう一つは、鏡の考えが直接読者に示される対談や、鏡を紹介する記事である。もっとも、こうした内容の記事は専門誌にはあまり見られず、一般女性誌の方に多く見られる。以上の分類に基づいてまず、鏡の著作活動の初期に見られる専門誌の内容について整理し、次に一般女性誌における鏡の執筆活動を取り上げる。

2-2 専門誌における「占い・おまじない」の記事とその特徴

すでに述べたように、鏡の専門誌における執筆活動は、80年代後半から90年代中盤に最も多く見られた。例えば、1989年4月号の『ムー』で鏡は、「謎のナチス占星術戦争」と題し、ナチスと占星術の関係を紹介している。記事には、1939年にヒトラーが演説する予定であった会場で時限爆弾が炸裂したが、ヒトラー自身はその暗殺計画を予知したクラフトという占星術師により、危機を回避することができたと書かれている。同様の内容の記事は他にも多数掲載されているが、その特徴として、物語の形式を取って紹介している点が指摘される。例えば上の記事のヒトラーが登場する個所は、「するとヒトラーは口許に例の独特の笑みを浮かべ、冷静な口調でこう答

えたという。『いや、まったく幸運に助けられたよ。幸運……にね』と書かれている。こうした記事は他にも、例えばイギリスの魔術結社に招待され、その儀式について書かれた「魔術結社 S. O. L. の秘密儀式に参入!」(『ムー』1988年11月号)や、震災や歴史的な変動が日食と関連していたとする「日食が世界史を動かしていた!？」(『ムー』2003年3月号)という記事が挙げられる。

また、鏡は『ムー』において、いわば「おまじない」に相当する実践可能な魔術の紹介も行っている。1988年7月号の『ムー』で鏡は、「生命の樹の実践パワー魔術」と題し、カバラに基づく「魔術」を紹介している。具体的には、呼吸したり声を出したりすることで全身がオーラに包まれるようになる訓練や、雑誌の付録にあるパワーカードを使用して、願望を達成するための儀式などが紹介されている。もっとも、ここで紹介されている魔術はカバラの詳細な知識の上に積み立てられたものであり、実行は困難であることが推測される。ここで目指されているものは「高次の世界の構造を理解」し、「自らの意思のままに現実世界を変化させていく」魔術の達成といった抽象的な内容が主である。こうした内容の記事は、例えば、魔女になるための儀式を記している1988年4月号の『トワイライトゾーン』(ワールドフォトプレス)における「月神降臨儀式大公開」などにも見られる。

鏡は1992年に創刊された『ムー』の女性向け雑誌『Elfin』でも執筆活動を行っているが、その内容は女性を意識したものになってはいるものの、『ムー』における執筆活動と同じく物語的な要素と専門的な内容に基づくものとなっている。例えば、長期にわたり連載を続けていたコラム「世界史を変えたホロスコープ」では、さまざまな有名人がホロスコープによって解説されている。1994年7月号の『Elfin』では、フランツ・カフカが取り上げられ、彼が生まれた1883年7月3日6時という時間からは、彼が天才的で偏った性格をもち自己否定の感情があることが、ホロスコープによって見られるとしている。

他にも、1994年7月号の『Elfin』では、「神秘リラクゼーション・グッズ大特集!」と題された記事が挙げられる。朝、昼、夜のそれぞれの時間に潜在能力を高める方法や呪文が紹介され¹⁶、さらに、魔法を助ける時計や鏡、パワーストーンを使ったソリティアゲームなどが写真入りで紹介されているが、これらのグッズには、例えば魔法使いがリアルなタッチで描かれているなど、一般的ではないデザインのものが多い。同系統の記事としては、魔女となり、恋やリラックスを行うためのメソッドが紹介されている、「使ってわかる!効果抜群の伝統魔術」(『Elfin』1994年2月号)や、2011年4月号の『MISTY』(実業日本社)における、読者が自ら占星術を行うための方法を詳細に記した「星占い入門」といった記事が挙げられる。『MISTY』の記事は、『Elfin』よりも易しい内容となっているが、やはり物語的で専門的な内容となっている。

ここまで、占いやオカルトを専門とする雑誌において、鏡がどのような内容の記事を執筆してきたのかを見てきた。ここからは、鏡の一般女性誌における執筆活動に注目する。

2-3 一般女性誌における「占い・おまじない」の記事とその特徴

ここではまず、典型的な例として、占いを特集した2011年1月号の『FRaU』における「2011年美と運命の西洋占星術」と題した記事を取り上げる。この記事の冒頭で鏡は、星の運行について、社会構造の変化を反映した「『カーディナル・クライマックス』と呼ばれる配置」になっているが、牡羊座と天王星の関係から新しいリーダーが生まれる気配もあると解説した上で、12星座ごとの運勢について詳しく解説している¹⁷。例えば双子座は、仕事については木星との関係で、多忙な期間が終了する一方で、新たな夢を持つ可能性があるとしている。他にも、人間関係や恋人などをめぐる、相性の良い星座と、悪い星座などについて書かれている。例えば射手座は疫病神の位置にあり、「肩をもつと周囲からムツとされるので気をつけて」などと書かれている。さらには、月ごとの運勢をグラフにしたものや、さらにはモデルの写真を配し、シャープなメイクが向いているといったアドバイスなどが、それぞれ2ページにわたり書かれている。

鏡の占いは12星座に基づくものだけではない。2006年8月号の『Grazia』(講談社)は「女を磨く夏」という題の特集で、「『30代の意味』月が教えるあなたの宿命と転機」という鏡の記事を掲載している。ここでは、月と女性の関係が密接であると述べられ、自分が生まれた時の月の形から、性格や人生の傾向を占うことが試みられている。例えば、生まれた時の月が新月であれば、「無邪気な乙女」のような性格であり、失敗を恐れずに人生を進むことが必要であるとアドバイスされている。他にも、三日月の場合は、好奇心がありながらも、不安定な精神状態にある「好奇心旺盛な少女」であり、焦ら

ずに人生を進むことが必要であると述べられている。鏡の「占い・おまじない」は、さらに、より具体的な内容に絞り込んだ内容のものも多く見られる。例えば結婚にかかわるアドバイスを載せた、「星と運命が導く結婚の法則」(2007年6月号『CREA』)という記事や、男性の星座にあわせた恋愛のアプローチを紹介する「男の本性を丸ハダカにする掟」(2000年3月号『CREA』)、職場の人間関係や上司との関係についても助言している「私の恋と美貌と才能」(2005年2月号『FRaU』)が挙げられる。

また、鏡は「おまじない」に相当する内容の記事も多く紹介している。例えば2008年2月号『CREA』における「今年こそ強運な女になる!」という特集で鏡は、「恋とカラダに効く神秘のハーバルアストロジー」と題し、占いとハーブを組み合わせた、「おまじない」に相当するセラピーを提案している。同じ記事は、12星座から見て向いているハーブを割り出した早見表が掲載され、例えばペパーミントが効果的な星座を持つ人は「年齢を重ねても若々しいムード。いたずらっ子のようなすばやい目の動きが特徴」であるが、「飽きっぽいのが欠点」とであると記した上で、ペパーミントは神経を落ち着かせる効果があるとしている。同じページには、ペパーミント風味のレアチーズケーキのレシピと写真、さらに効果的なメイクの内容まで書かれている。

鏡の「占い・おまじない」は、より具体的な商品とセットで紹介される場合も多い。例えば「私とあの人の関係を輝かせる石は? パワーストーン相性占い」(2011年1月号『FRaU』)と題した記事では、ユングが錬金術に傾倒していたことを紹介し、その上で、自分と相手の誕生日に基づき、相性を良くするための宝石を割り出し、紹介している。他にも、「ジュエリー、それはかけがえのないこの星と女たちとの記憶」(2005

年2月号『FRaU』)という題の記事では、宝石と占星術との関わりが哲学や神話と絡めながら解説されている¹⁸。2005年2月号の『ef』(主婦の友社)では「2005年史上最強の開運BOOK」と題し、ヘアメイクアップアーティストであるTAKAKOと、12星座別に効果的なメイクの方法を、具体的な化粧品とともに紹介している。

以上、鏡リュウジの「占い・おまじない」に関する執筆活動を、専門誌と一般女性誌のそれぞれに分け、整理してきた。鏡の「占い・おまじない」に関する記事は専門誌では、陰謀論や魔女といったものについて書かれ、物語のような形式で紹介されていた。さらには、「おまじない」を試みることで、そうした非日常的な物語に類する力を身につけることが目指されている。他方、一般女性誌で鏡は、西洋占星術に基づく鑑定内容を、12星座や時期、目的に応じて示している。その結果に働きかける「おまじない」は、女性にとって日常的で、具体的なものと結びつけられる。こうしたものは、女性たちにとって「かわいい」ものとされる点にも特徴がある¹⁹。鏡の「占い・おまじない」が、「無邪気な乙女」「好奇心旺盛な少女」「いたずらっ子」といった、「少女」をイメージさせるキーワードを使用していることから理解されるように、一般女性誌において鏡の「占い・おまじない」は、イメージとしての「少女」を強調する点に大きな特徴がある。

専門誌と一般女性誌のそれぞれに見られる鏡の「占い・おまじない」は一見するとまったく異なる様相を示している。だが、これらの記事は、鏡が専門とする西洋占星術を基礎とし、それによって記事を書いているため、共通する要素を見出すことが出来る。整理してきたように、専門誌では西洋占星術に基づき、さまざまな物語や魔術の実践方法を示しているが、それ

は専門的知識に基づくものであることが理解される。一方、一般女性誌における西洋占星術の解説や、ユングについての紹介、さらにはイギリスや京都についての解説などからも、鏡の「占い・おまじない」に関する知見が学問としての背景をもっていることが示されている。このように、それぞれの雑誌における鏡の「占い・おまじない」の記事は、学問的な知識体系に裏付けられたものなのである。

一般女性誌に見られる鏡の「占い・おまじない」が、イメージとしての「少女」を根底にもっていることや、また、鏡の「占い・おまじない」が学問としての側面を持っていることは、それぞれの雑誌に見られる対談記事や紹介記事で、さらに読者に理解される仕組みとなっている。次に、それらの記事から、その二つの内容について整理し、検討する。

3 学問としての「占い・おまじない」と女性

3-1 「占い・おまじない」とイメージとしての「少女」

すでに整理してきたように、一般女性誌における鏡リュウジの「占い・おまじない」には、イメージとしての「少女」を表現する内容が多く含まれている。それは、鏡が星の運行だけでなく、「少女」のイメージを核にすることで、女性の生きづらさ、困難さに立ち向かう方針を与えることが出来ると考えているからである。2006年3月号『CREA』における特集「女の占い決定版」の「恋愛ステージを上昇させる」と題された美輪明宏との対談では、鏡は自らに持ち込まれる相談をもとに、女性が「社会的に自立したいと思って頑張れば頑張るほど、男の人からモテなくなる。つまり『女性である』ということと『男性社会でどんどん仕事をして

いく』ことの間で引き裂かれているよう」であると述べている。さらに、そうした男性化した女性は男に嫌われやすいとする美輪の言葉に対し、「僕は女性も大変だなと思います」と応じた上で、「幼稚化したくない。かといって肩肘張っていたいわけではない」という働く女性が、その「真ん中」を見つけ出すための役割として、鏡は占星術の役割を説明している。

一方で、すでに述べたように、女性たちに進路を示す鏡の「占い・おまじない」には、イメージとしての「少女」が織り込まれている。例えば「星座と運命——鏡リュウジ DELUX」と題された2005年8月号の『FRaU』で鏡は、漫画家の安野モヨコと「やっぱり魔女が好き!」という題の対談を行っている。これは、映画「奥様は魔女」のロードショーにあわせた内容で、安野が少女マンガ誌の『なかよし』に連載した『シュガシュガルーン』という魔女を素材にしたマンガについても言及されている。この対談のなかで、かつて女性のセクシュアリティが悪と結びつけられ、男性から悪とされていた魔女のイメージが、日本では少女の姿に転化していると鏡はいう。なぜなら、日本では「少女は悪に対抗する神聖な存在として捉えられている」ために、「まっすぐな一途さがある、悪い大人を圧倒する」ものであるからとしている。

他方で、こうした「少女」のイメージは、鏡自身が自らを「星の王子様」と呼ぶように、自身の「少年」のイメージとも呼応している。同じく2005年8月号の『FRaU』に掲載された「星の王子のできるまで」では、鏡と交流のある女優や歌手、作家といった人びとが鏡をどのように見ているのか示されているが、最も目につくのが、例えば「可愛い少年」や、「目のクリッとした可愛い男の子」という「少年」に関連する表現である。他にも、温かい、優しすぎる、チャーミング、ピュアーとい

った言葉も並べられている。同じページに記されている、鏡の交流関係に関連するエピソードも、こうした純粹さのイメージに寄与している。第三者に付与される形で表現される、鏡自身の「少年」のイメージからは、ひるがえって鏡自身の占星術と密接に関わっている「少女」のイメージがどのようなものであるのかについて、さらに理解される内容となっている。

こうした記事からは、鏡の「占い・おまじない」はイメージとしての「少女」を織り込むことで、偏った生き方をしたくないとする女性たちに効果があると考えられていることが読み取れる。イメージとしての「少女」とは、純粹でありなおかつ男性に振り回されない強さを象徴するものであり、さらにそれは、鏡自身の持つ「少年」のイメージとも呼応する関係にある。一方で、すでに述べたように、鏡の「占い・おまじない」は膨大な知識に基づく学問としての側面をもっている。

3-2 学問としての「占い・おまじない」

すでに指摘したように、鏡の「占い・おまじない」に関する知識が学問的な教養と深く結びついていることは、初期の専門誌における対談からも十分に察することができる。1991年4月号の『ムー』では「現代の神話は占い師が作る!」と題し、水晶を通して人の前世を鑑定する占い師マーヤラジャとの対談記事が掲載されている。この記事でマーヤラジャは、子どものころからいわゆる霊的な体験をしており、占いにも前世から出会っていたと述べている。対して、鏡は若手魔術研究者と紹介され、占いとの出会いも本屋で占星術の本を買ったことに由来し、現在もたびたびイギリスに行き、本を大量に買い、現地の魔術師や史跡を訪ねるなど研究を重ねていることが言及されている。また、対談の中で

鏡は、数年前まではマーヤラジャのような生得的な資質による占いに違和感を覚えていたとし、「とにかくカチツとした、学問的で伝統的なものが好きだった」と研究家の立場を強調している。

鏡の「占い・おまじない」がより学問的な知識体系と結びついていることを示す典型的な例が、2010年8月号『Harper's BAZAAR』(Harper & Brothers社)における「星の王子京都へ行く」のなかで掲載されている、宗教学者、鎌田東二との対談だろう。「教えてください!パワースポットってそもそも何ですか?」と題した対談で、「パワースポット」²⁰ブームで注目された京都が取り上げられているが、そのなかで、鎌田は現代においてブームとなった「パワースポット」を、聖地巡礼の観点から解説しており、聖地とされる場所の条件について解説している。その上で、鏡と鎌田は、京都が陰陽五行説や、四神相応に基づいて作られたものであり、霊的に守られた場所であることを歴史的な観点から述べている。

さらに、こうした学問としての「占い・おまじない」の強調は、占星術が学習によって習得できるものであることも示唆している。それは、2005年8月号の『FRaU』では、「角田光代が教わる『心理占星術が当たる理由』」と題した、作家である角田光代との対談が、紙面上での授業という形式をとっていることから伺える。その記事で鏡は、占星術の鑑定を行うための基となるホロスコープの作り方や、そこから得られる結果についての割り出し方を、鏡が教師であり角田が生徒という役回りでも解説している。こうした対談からは、占星術の学問的な側面を強調するとともに、鏡自身が特権的な立場から女性に対し、占星術に基づく助言を行っているのではないことも示されている。さらに、占星術は素人にも学べるものであり、趣味として楽しむことができることも示唆されているのである²¹。

4 「占い・おまじない」の「地図」と女性

ここまで、鏡リュウジの「占い・おまじない」が専門誌と一般女性誌において、それぞれどのように示されてきたのか整理してきた。ここからは、これまでの議論を振り返った上で、鏡の「占い・おまじない」がどのような「地図」を示してきたのかを明らかにする。

すでに述べたように、鏡の「占い・おまじない」の専門誌における執筆活動は、陰謀論や魔女といった存在を物語形式で紹介するものであり、非日常的な力を身につけるための、いわゆる「おまじない」に相当する魔術の実践方法が紹介されている。一方で、一般女性誌における執筆活動では、12星座ごとの詳細かつ具体的な鑑定結果を読者に示し、「おまじない」として、女性にとって日常的である「かわいい」ものを提示している点に特徴がある。記事には「かわいい」ものだけでなく、「少女」をイメージさせるキーワードが多用され、鏡の「占い・おまじない」の根底にはイメージとしての「少女」が組み込まれていることが示唆される。さらに、これらの記事は、鏡の「占い・おまじない」における膨大な知識にもとづいたものであることも認められる。

さらに、鏡の「占い・おまじない」に見られるイメージとしての「少女」や、学問としての側面は、対談を通して強調されている。鏡の考えによれば、特に働く女性は男性化や幼稚化に偏らずに生きることは難しく、大人の女性としての中庸な距離を割り出すために「占い・おまじない」は存在する。鏡の「占い・おまじない」に織り込まれている「少女」のイメージは、そうした女性たちに優しさや繊細さ、まっすぐさを示唆するものとして存在し、さらにそれは、鏡が自身に与える「少年」のイメージとも呼応する形となっ

ている。その一方で、専門誌で自らを研究者と位置づけるだけでなく、一般女性誌では鏡が読者と同じ地平に立っていることが示唆される。すなわち、鏡はみずから「占い・おまじない」の学問的側面を強調することで、自身が霊能者のような特別な存在ではないことを読者に伝える。それと同時に、「占い・おまじない」が学問としての深みを持ち、学習することが可能であることを読者に示しているのである。

では、鏡の「占い・おまじない」は一般女性誌においてどのような視点に基づく、どのような「地図」を示しているのだろうか。それは、専門誌に見られる「地図」とどのような相違を見せているのだろうか。冒頭で整理してきたように、「地図」とは、空間的な世界像を示すという特徴を持ちながら、同時に、「地図」それ自体が社会的実践によって生きられるという特徴をもっており、両者が関連することで、「地図」は作り上げられている。もっとも、「占い・おまじない」による「地図」は「占い・おまじない」固有の視点に基づくものであり、さらには、テキストとしての側面が突出するものであるために、実践する者によって大きく左右されることになる。

専門誌における鏡の「占い・おまじない」は非日常的な物語をつむぎだすものであり、その「占い・おまじない」によって示される「地図」は、いわば異世界における道標としての役割を担っているといえよう。もちろん鏡が示す「地図」でも、「おまじない」という形で実生活とのかかわりが視野に入れられてはいるが、そのことがかえって鏡の「地図」の非日常性を強調するものとなっている。ただし、ここでいう「地図」は鏡の視点を通した「地図」であり、したがって非日常性を志向する「地図」の特徴は、あくまで鏡の示す「地図」の特徴にほかならない。けれども、繰り返し指摘してきたように、鏡自

身はみずからを超越的な立場に置いてはいない。それどころか、専門誌における執筆では、鏡は、魔術や異界といったものを、その真偽を問うことなく、好奇心の対象としてそのまま提示している。このような、多方面のことがらに興味をもち、もっぱら好奇心に駆られて世界や宇宙を探検する「少年」のイメージこそが、専門誌で鏡が「古い・おまじない」によって提示する「地図」を特徴づける視点にほかならない。したがって、専門誌における鏡の「古い・おまじない」が示す「地図」は、鏡の内なる「少年」を視点とする「少年の地図」と言ってよいだろう。

一般女性誌における鏡の「古い・おまじない」は、具体的な日時や目標にあわせた内容のものが盛り込まれ、それによって、女性たちに偏らない生き方をするための通路を示唆している。そうした点から、鏡の「古い・おまじない」が社会的実践による世界像としての「地図」という性質が強いことが理解される。イメージとしての「少女」は、ここでは「地図」を生み出すための視点のみを提供しているだけではない。すでに述べたように、イメージとしての「少女」は過去の女性自身ではなく、純粋性を持ちながらも、男性から自立した強さをもつものの象徴として位置づけられる。それは、多様な人間関係に直面せざるを得ない大人の女性に現在の位置を示す、いわば起点としての役割をも果たしている。「おまじない」として具体的な「かわいい」ものが示されるのも、イメージとしての「少女」を身近な目印として引き寄せる役割を担っているためと推測される。それゆえに「古い・おまじない」が示している「地図」は、単に自己を取り巻く空間的な平面図というよりも、イメージとしての「少女」を起点として偏らない生き方のための経路を示しつつ、同時にそれを、実際の場面限定し、方向性を示す

見取り図としての「地図」として存在していることが伺える。

こうした、女性誌に見られる鏡の「古い・おまじない」による「地図」と、イメージとしての「少女」の存在は、「地図」そのものというよりは、GPS（グローバル・ポジショニング・システム）により、建物との位置関係から次に進むべき経路を割り出し、提示する、携帯電話や車の「ナビ（ナビゲーションシステム）」に近いといえる²²。そして、その「ナビ」を作り出す視点となり、さらには、電波のやりとりによって現在の場所を割り出すGPSにおける衛星の代わりとなっているのが、鏡自身の視点ではなく、鏡の「古い・おまじない」においても重視される、イメージとしての「少女」なのである²³。

ところで、ここまで鏡の「古い・おまじない」が掲載されている一般女性誌の主な受容者を、これまで「古い・おまじない」の主役とされてきた少女たちとは異なる立場にある女性として、いわば相対的に大人と表記してきた。だが、こうした「少女性のナビ」の存在は、その大人の内実そのものを問うものとしても浮上しているといえるだろう。最後にその点について記しておく。

M・エリアーデによると、宗教とは、「聖なるもの」をとおして世界を秩序立てる象徴的な体系である。したがって、宗教によって人間は、世界を透明に見ることができ、世界を意味あるものとして了解する「大人」として存在することができる。しかし、近代化し、宗教が世俗化した社会では、世界を意味づける「大人」もまた存在し得なくなっている。宗教はかつて社会を包摂し聖なるものを仲介する存在であり、社会の未生以前の存在を人間存在としての完成へ導くという重要な機能を果たしていた。言い換えれば、彼にとって、世俗化する以前の宗教は、子どもを世界の一

員として認められる「大人」へと導くものであったのである。しかし近代化した社会で、宗教は世俗化し、ひとつの私的領域のものとなった。その結果、子どもが「大人」になるための有力な拠り所のひとつが失われ、子どもはいつまでも、世界を見通せる「大人」になれなくなった。このような人間を、エリアーデは「悲劇的実在」(Eliade 1957=1969:194)と呼ぶ。

鏡の「占い・おまじない」が一般女性誌において示す「少女性のナビ」は、イメージとしての「少女」を視点として、女性たちに有用な道すじを示している。しかし、こうした巧みな「少女性のナビ」の出現は、直近の方向性を決めることそれ自体が目的とされることでかえって、彼女たちが目的地を持たない「悲劇的実在」であることを示唆している。大人とされる彼女たちの存在が、あくまでイメージとしてではあるが、「少女」の延長上に置かれるのも、大人がみずからに固有の意味を持たないことに由来していると推測される。近代において生み出された、エリアーデのいう「悲劇的実在」という存在と、大人の女性とがどのような関係にあるのかについては、さらなる議論が必要だろう。だが、到達すべき地がみつからず、「少女性のナビ」によって巧みに生きようとする女性たちは、彼女たちが年齢的、社会的には大人でありながらも、世界を見通すことのない、いわば迷子であるという事態を暗示し、さらには大人という存在そのものへのありようを問う結果となっているのである。

注

¹ 板橋作美も『占いの謎——いまも流行るそのわけ』(板橋 2004)のなかで、占いは相を読み取るものとし、地図のような役割を果たしていると論じている。

² 「スピリチュアル・ブーム」は「スピリチュアリティ」

を根底としながらも、より商業的で大衆的なブームとして広まった。宗教教団という枠組みではなく、「スピリチュアリティ」という観点に注目した議論については、島菌進『スピリチュアリティの興隆——新霊性文化とその周辺』(島菌 2007)と堀江宗正『スピリチュアリティのゆくえ(若者の気分)』(堀江 2011)を参照されたい。

³ 『anan』は2010年3月号における特集「スピリチュアルBOOK」のなかで、「スピリチュアル・カウンセラー」を名乗る江原啓之や美輪明宏とともに、2000年代より広まった「スピリチュアル・ブーム」の牽引者として取り上げられている。

⁴ 「スピリチュアル・ブーム」そのものに焦点をあてた議論としては、櫻井義秀『霊と金——スピリチュアル・ビジネスの構造』(櫻井 2011)や、スピリチュアリティと消費の結びつきに注目し、分析した有元裕美子『スピリチュアル市場の研究——データで読む急拡大マーケットの真実』(有元 2011)の議論が挙げられる。なかでも有元は、占いにも注目し、20代から40代の幅広い世代の女性たちがWebや書籍を通じた占いのライトユーザーとなっていることを指摘する(有元 2011:148-167)。また、「スピリチュアル・ブーム」の受容者に注目した研究として、江原啓之のファンやアンチによる言説に注目した「スピリチュアルとそのアンチ——江原番組の受容をめぐる」(堀江 2010)を挙げておく。

⁵ 他にも芳賀は少女向けの占い専門誌として、『プチ・バースディ』『ポム』『MONIQUE』『MISTY』などを取り上げている。なお、こうした少女向けの占い専門誌は現在、全て休刊または廃刊している。

⁶ 占いについての著作に注目した研究としては、他にも、「占い本」が生まれた明治期に注目して論じている鈴木健太郎「占い本と近代——商品化された知の権威をめぐる」(鈴木:1996)や、六星占術を専門とする細木数子の著作に注目し、占いから宗教に接続する過程について論じた種田博之「占いの宗教への

変容——細木数子の『古い本』を事例として」(種田 2000) が挙げられる。さらに、日本、アメリカ、メキシコの雑誌を比較した『女性雑誌を解説する——COMPAREPOLITAN 日・米・メキシコ比較研究』(井上輝子・雑誌研究会編:1989)では、恋愛と占星術についても言及され、ルネ・ヴァンダール・ワタナベが取り上げられている。また、テオドル・アドルノは『The Stars Down to Earth: and other essays on the irrational in culture』(Adorno:1994)のなかで、アメリカの新聞やテレビの占いについてのコラムに注目し、こうした日常に浸透している占いが近代の半透明な社会を生きる指針を示しているとしているが、一方で、占いに見られる非理性的な思考が全体主義に結びつく可能性についても指摘している。

⁷ 少女と「古い・おまじない」についての先行研究は他にも、渋谷の女子高生たちへのアンケートをもとに、10代の少女たちがどのように占いに向かったのかについて分析した、宮本靖子「女子高生占い調査——彼女たちは果たして占いに走ったのか」(宮本 1990)や、東京都二十三区民調査を基にした『呪術意識と現代宗教——東京都二十三区民調査の社会的分析』(竹内・宇都宮編:2010)のような統計的研究をあげることができる。後者の調査では、若者、特に女性と占いの親和性が指摘されている。また、「古い・おまじない」と女性を結びつける議論として、女性と占いの結びつきそのものを問う種田博之「古いと女性——占いの今日の特性」(種田 2000)、タロットカードの比較によって日本の占いが「かわいい」文化に組み込まれていることを検討した、ミラーの「Tantalizing Tarot and Cute Cartomancy in Japan」(Miller:2011)などがある。

⁸ 以下で取り上げる雑誌では、「古い」という言葉は頻出するが、「おまじない」という言葉は登場しない。だが、占いの文脈に存在するという点で、「魔術」や「セラピー」も「おまじない」に位置づけられるものであるといえる。したがってこうしたものが取り上げられる場合も、「古い・おまじない」という

表記で統一することにする。

⁹ オカルトや占い専門誌も、対象とする年齢や性別に違いがある。ただ、それはあいまいなものも多くあり、例えば『ムー』はもともと男子高校生向けの学年誌から出発していたが、時代を経るごとに幅広く受容されるようになった。また、本稿の目的はあくまで一般女性誌であるために、専門誌の内側における相違についての検討は次の機会としたい。

¹⁰ 例えば 2005 年に、芸能人や漫画家、クリエイターなどに焦点を当てたドキュメンタリー番組「情熱大陸」や、女性向け番組である「LaLa」に出演している。だが、テレビ出演回数自体は多くない。

¹¹ 携帯サイトでは、鏡リュウジの占星術による鑑定を示す「鏡リュウジ完全鑑定」や占星術の成り立ちについてのコラム「プラネタリー夜話」といったメルマガが存在する。

¹² 旅行会社「T-TRAVEL」と組み、イギリスの「パワースポット」と呼ばれるグラストンベリーや、ロンドンの占星術を専門とする店を巡るツアーを企画している。

¹³ 例えば女性向けのハイブランドである「CHANEL」と組み、口紅の色と占星術を結び付けた商品案内をもとにした「星座から見るルージュココシャインメッセージ」と題したキャンペーンや、OLに向けたファッションブランド「OPAQUE」が銀座に建てたファッションビルを、西洋占星術に基づいてプロデュースしたイベントなどがこれにあたる。他にもアクセサリーやアロマキャンドル、カバンといったものもプロデュースしている。

¹⁴ 「心理占星術研究者・翻訳家 鏡リュウジ公認情報サイト」については http://www.geocities.jp/kagami_info/index.html、「Between the worlds」については <http://ryuji.tv/> (共に最終閲覧日 2012.3.2)。

¹⁵ それぞれの一般女性誌が読者層とする世代については、ファッション誌を中心に世代やジャンルについての情報を掲載しているサイト「ファッションマガジン雑誌ガイド FASHION MAGAZINE」<http://>

www.magazine-data.com/ を参考にした。またこうした雑誌は、10代から20代向け、20代から30代向けと世代についての表記が重複している場合が多いが、そのまま表示している。10代から20代向けとする場合、女子高生や大学生をターゲットとしたものが多く、20代から30代向けと表記されている場合には、OLや主婦といった、働く女性向けられた内容のものが多いという違いがある。また、20代向けと限定されている雑誌は20代から30代向け、30代と限定されている場合には、30代から40代向けの区分に組み込んだ。また、女性週刊誌については対象年齢が明示されていないため、除外した。もっとも、鏡の女性週刊誌における記事は少なく、その点にも特徴がある。

¹⁶ 呪文として「御身、栄光なる霊界と現世の太陽よ、今東の空に昇らんとするのは御身の象徴なり。我に力を与え、導きたまえ」と表記されている。

¹⁷ こうした占星術から見た星の運行についての解説は、それぞれの記事の冒頭に必ず付記されており、鏡の占星術が客観的な知識によったものであることが示される内容となっている。

¹⁸ この記事の後に、ジュエリーのハイブランド「BOUCHERON」が主催する鏡のトークショーへの案内が掲載されている。このように、商品に意味を与えるものとして「占い・おまじない」が位置づけられる記事が多く見られるが、一方で、これらの商品はすでにブランドとしての地位を確立しており、コラボやタイアップといった形でイベント的な要素を与える試みを行っているといえる。

文献

Adorno, Theodor W, 1994, *The Stars Down to Earth: and other essays on the irrational in culture*. Crook, Stephen ed., London: Routledge.

有元裕美子,2011,『スピリチュアル市場の研究』東洋経済新報社.

土井隆義,2008,『友達地獄——「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房.

Eliade, Mircea, 1957, *Das Heilige und das profane: Vom Wesen des Religiösen*, Hamburg:Rowohlt. (=

¹⁰ 女性誌がファッションや商品において「かわいい」のあり方をどのように示しているのかについては、古賀令子『「かわいい」の帝国——モードとメディアと女の子たち』(古賀2009)を参照されたい。

²⁰ パワースポットとは「スピリチュアル・ブーム」から派生した、恋愛や仕事などに効果のあるとされ神社や史跡などを指す。

²¹ 今回は、鏡の「占い・おまじない」が実際にどのように受容されているのかについては、検討していない。しかし、トークショーやカルチャーセンター、鏡のTwitterでのやりとりを見ると、占星術にまつわる星の位置関係や、それがどのようにホロスコープと関連しているのかなど、占星術にまつわるやりとりが多く見られる。

²² 土井隆義は『友達地獄』(土井2008)のなかで、若者のあいだに広まるケータイに注目し、彼らがメールを通じ友達との距離を押し量り、自分の位置を割り出そうとしていると指摘する。そのため、ケータイとは若者にとって、単なる電話機ではなく、社会的なGPS(グローバル・ポジショニング・システム)だと述べている。一方、「少女性のナビ」は、イメージとしての「少女」がGPSのいわば衛星のような役割を果たし、ナビとして人間関係のほうへと促すという点に特徴があり、土井のいうケータイとは異なる役割を担うものであると考えられる。

²³ 公式サイトが「Between the worlds」と名づけられているのも、鏡のこうした「占い・おまじない」の異なる「地図」の示し方に関連していると推測される。

- 1969, 風間敏夫訳『聖と俗——宗教的なものの本質について』法政大学出版局)
- 芳賀学, 1994, 「少女たちの物語製造装置・占い」『大航海』(1) 新刊社, 67-72.
- ・弓山達也, 1993, 『祈る ふれあう 感じる——自分探しのオデッセー』IPC.
- 堀江宗正, 2010, 「スピリチュアルとそのアンチ——江原番組の受容を巡って」『バラエティ化する宗教』青弓社.
- , 2010, 『スピリチュアリティのゆくえ (若者の気分)』岩波書店.
- 井上輝子・雑誌研究会編, 1989, 『女性雑誌を解読する——COMPAREPOLITAN 日・米・メキシコ比較研究』垣内出版.
- 板橋作美, 2004, 『占いの謎——いまも流行るそのわけ』文藝春秋.
- 古賀令子, 2009, 『「かわいい」の帝国——モードとメディアと女の子たち』青土社.
- Miller, Laura, 2011, *Tantalizing Tarot and Cute Cartomancy in Japan*, “Japanese Studies”, 31(1), 73-91.
- 宮本靖子, 1990, 「女子高生占い調査——彼女たちは果たして占いに走ったのか」『月刊アクロス』17(7), パルコ出版, 78-81.
- 大塚英志, 2001, 『定本 物語消費論』角川書店.
- 櫻井義秀, 2009, 『霊と金——スピリチュアル・ビジネスの構造』新潮社.
- 島蘭進, 2007, 『スピリチュアリティの興隆——新霊性文化とその周辺』岩波書店.
- 鈴木健太郎「占い本と近代——商品化された知の権威をめぐって」島蘭進・石井研士編『消費される〈宗教〉』210-247.
- 竹内郁郎・宇都宮京子編, 2010, 『呪術意識と現代宗教——東京都二十三区民調査の社会的分析』青弓社.
- 種田博之, 2000, 「占いの宗教への変容——細木数子を事例として」『関西学院大学紀要』84号 145-155.
- , 2000, 「占いと女性——占いの今日的特性」『産業医科大学雑誌』22(4):351-362.
- 若林幹夫, 2009, 『地図の想像力』河出書房新社

(はしさと みずほ 和光大学現代人間学部非常勤講師 mizuho.h@f8.dion.ne.jp)
 (査読者 芳賀学、中島和歌子)

“Fortunetelling and OMAJINAI (Charm)” and Women:
 a “Map” shown by Mr. Ryuji Kagami, an astrologer, and its change

HASHISAKO, Mizuho

In recent Japan fashion magazines for women often publish articles about “fortune-telling and OMAJINAI (charm)” and they are accepted by adult women. Mr. Ryuji Kagami, an astrologer, is one of the famous writers of those articles. A “fortune-telling and OMAJINAI (charm)” is said to have been mainly for girls and to have shown them a “map” to establish a standard for their future life. But Kagami’s “fortune-telling and OMAJINAI (charm)” are for adult women rather than for young girls. This fact seems to show that what map people expect “fortune-telling and OMAJINAI (charm)” to provide is changing and that it is caused by a change in recent Japanese society. In this paper I intend to verify that this change is deeply related with the raise of the social status of women in Japan.